

非

新編李鴻章回信三編 乾




5
2171
1



横心合意の頃野の秋
信正を驛路の腰に
加茂の社お母教も打
けき如く聲に聖の横
主事丹もあつと風
枕も空に話し又雪の

月と赤糸の吹母入
挿しとてけり無能
お母の序詞一を
半の座も主人袖も
名前の若くは
困る所もハとて

後きうりしは只一初の間
 こゝろはまはれりてあはれ
 こゝろはまはれりてあはれ
 こゝろはまはれりてあはれ
 こゝろはまはれりてあはれ

七十五歌
 孝牛寺主人の


附言

○本集編集の趣意も庚寅年の冬發行せし初篇に依りて又辛卯
 年の冬出版せし二編にも載せられ候今より其後
 ○此二編の壬辰年の冬別紙に依りて所ありしを他編に附れしを
 是れ傳へしと項目人々に伝へしれ補修に仕られ其母性の隠りて
 漏らさるるもあらざる人々補ふ別紙に

○本集の初篇二編と別紙を讀みしと重なる既に各編に在りし將
 四篇五篇も繰り出せんとす所に巻中にて記載する吟題の數を
 暗記するに容易ならしむるを篇より冊の初紙に録し掲
 げしるゝと便利なる也

明治廿六年一初冬時より發行

槐軒主人の啓

○ 目 録

○上の巻	初空	一御降	二惠方	三着衣初	五
初夏	五初曆	六書初	七屠蘇	八芸候	八
松の内	九春神祇	土初午	土餘寧	土多巢	土
海	厂	土春風	土喜水	土雪解	土下萌
獨活	丸多候	丸雜	廿葎	廿竹候	廿
名所	芸桃李	芸海棠	芸梅木	芸苗代	芸
蛙	芸雀子	芸鹿角	芸躑躅	芸茶指	芸
雜春	世春名残	世鯉	世鮎	世粽	世
梅	芸菖菊	芸苔の花	芸葉玉	芸團扇	芸
蚊	芸蝙蝠	芸菖虫	芸花蟻	芸麦秋	芸
夏節	田田樓	田水室	田蟬	田水鷲	田

鶏 甲虫 子 只暑 只族体 五 只雜 甚 季
 御祓 五連句 牙山二卷 自辛一至辛四

○下の巻 閑居 一初涼 一霧 二秋の候 四

秋楯	五秋の蚊	五秋茄子	六五箇盆	七梅待	七
焼米	八相撲	九京場	十厚	土添	土
旭吹	土次黏	土苔	土芙蓉	土松榴	土
種瓢	六秋毒虫	七夜寧	六名不月	九竈馬	九
蟪蛄	世鷲	世椎実	世木犀	世梅候	世
多	世雜秋	世神留守	世産戸忌	世十夜	世
多	世紙衣	世納豆汁	世素蒔	世茶の花	世
不	世家時雨	世神樂	世里神乐	世栝尾花	世
多	世炭竈	世名所	世水柱	世	世

年木樵	三綱代守	甲巨燧	甲埋火	四木兔	三
延加	只掛乞	只冬述懷	只年の尾	只	只
連句	只仙二卷	自平至平三		以上	



新選年浪發句集三編

藤年 潔氏遺愛之記

上の巻

半日庵芳律選
芙蓉庵文禮校
一具庵尋香閱

初室

初室の心と 隅持巾ふニの山 東京 永 櫛
 ちとるく 輪も言 初室 箭 浦
 初室や 名なれ 山も初室 其 尤
 初室や 日の如く 方比 日の如前 素 青 宜 水

初室や 依きて 忘れぬ 夢のうらみ
と 法室や 山より 心の 雲一物
鞠燈も 古い 夢の 影 初室に
念入て 初室に 夢の 影 初室に
暫い 夢の 影 初室に 夢の 影
初室に 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
初室に 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影

羽後 唯月 静風
初室 本川
相模 有月
信濃 有儀
常陸 有山
陸中 有山
越後 有山
上毛 有山
吳 羊

初室や 白く 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影
と 夢の 影 初室に 夢の 影

儿 堂
睡 痴
琴 芳
梁 村
阜 川
洲 巖
文 啓
下 隣
我 友
相 美
周 年
豊前 吳 水

幼室布旅の果報を二足傳
 背を伸るやうにありて油室
 喜む眼もさやうなりけり
 幼室よとや馬の里のりやうに

馬降

於晴も馬降らうと云ふ
 馬降や大坂の境へ去る程
 何をか馬降 遊馬の晴室
 馬降の鞍 初と云ふは晴室
 馬降と云ふは馬の目の南の馬
 何をか馬降 遊馬の晴室
 馬降や池の細柳の背をさす

豊前 聡 史

十勝 祥 松

相模 宗 緯

上毛 歳 山

近 晴 月

歸 山 琴

松 三 山

築 少 樹

馬降 やらうと云ふは馬の
 何をか馬降 遊馬の晴室
 馬降の鞍 初と云ふは晴室
 馬降と云ふは馬の目の南の馬
 何をか馬降 遊馬の晴室
 馬降や池の細柳の背をさす

越後 空 海

信濃 貫 山

磐城 好 雲

芳 山 雲

如 左 山

羽前 如 風

磁 隙 隙

羽後 泉 隙

素 白 泉

身 白 泉

永 嘯 泉

歳 年 嘯

窓のすゝえ方 柿のやうに 船
 羽後 津
 物もす 鴨の 籠の 元方 元
 心と 元吉 方す せん ね ね
 空うら ね ね ね ね ね ね
 我 旅 した 家 士 眼 高 元 方 元
 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸 幸
 元 方 元 方 元 方 元 方 元 方
 明 市 戸 中 八 方 窓 元 先
 上 松
 茶 榎 吉 方 清 新 元 先
 東 松
 梅 元 元 元 元 元 元 元 元
 白 元 元 元 元 元 元 元 元
 能 元 元 元 元 元 元 元 元

上

着衣始

空のそと 糸のとり 官 着 衣 始
 豊 豊
 後 後
 先 親 女 居 間 へ けり けり 着 衣 始
 豊 豊
 前 前
 人 柄 常 一 一 一 一 一 一 一 一
 着 衣 始 一 一 一 一 一 一 一 一
 婦 一 一 一 一 一 一 一 一
 常 陸
 一 一 一 一 一 一 一 一
 羽 後
 着 衣 始 一 一 一 一 一 一 一 一
 柳 下
 烟 精 力 仲 間 前 着 衣 始
 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一
 着 衣 始 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一

二

と和のる新やと山 小着夜初
た 常うちのよききけり
府と才力ちる古由や 若衣初
うれ 本縁ありら力多きと見
灯 西上人 後や 着夜初

初夜

初夜の續きも 久はき 二日元
とつ多しと今 初夜ひたり 難のそ
暮の根ととのせさるる音や 宝船
初ゆきや 吉世の橋 初夜の月
とつ多や 後 初夜を好笑ひ歌
初よりや 難 久はきとて元

桂 月
空 海
古 仙
可 芳
芳 律

出雲

員代

美濃

梅 系
清 泉
吳 電
黙 史
吳 水

初夜の由 一や 船の小酒盛

信濃

常陸

磐城

羽後

一

四

里

高橋

一

歳

東

伯

梅

樵 翁

曉 翠

芳 山

本 鳳

一 鳥

四 林

里 山

高橋

一 松

歳 琴

東 友

伯 志

初多や色 昔をありの修 東京其
とく春や惜るも時を力あひ新 源 蕙
初多の嘯や姉の竹切者 芳 律

初曆

神の灯傳あら増るるや初曆 出雲 一 翁
演萩の音信すんも川曆 周防 殊 月
媒人下 先見し 初とみ 員他 花 旌
梨子の燈もありとんこ美 豊前 曲 朧
月知し葉りそやせん初曆 其 左 淇 園
初曆は好まも借とられり 武彦 可 山
旅人ぬる心かたえ好も川曆 武彦 可 山
初人多す 机の上や初曆 頓 智

開くはあらの花のどろ曆 友 山
親の眼の赤く軽舟も初曆 聴 泉
旅先や借るるのめいも川曆 上 毛 洲 巖
初とみ 初とみ 琴 芳
初とみ 初とみ 文 禮
初とみ 初とみ 芳 律

書初

神持とまき 初とみ 筆始 伊勢 青 邨
多初や 可られと字を巻らる 一 翁
七あらぬ子の殊務も子華はめ 梧 栖
書初や 引替たある 机 筒 溪
画書て指てもやそれつ筆始 未 曉

書初や親の力とある 拳
 福丸壽毛子のうらふあり筆始
 少初を結了旅りの空家うれ 盤城 有 儀
 書初や和孫の多柄のえせを 左 竹
 書初や和孫の多柄のえせを 羽後 格 風
 書初や和孫の多柄のえせを 公 木
 書初や和孫の多柄のえせを 素 白
 書初や和孫の多柄のえせを 月 琴
 書初や和孫の多柄のえせを 芳 古
 書初や和孫の多柄のえせを 律 仙

年波の雛子重し 試毫 文 禮

屠 蕪

屠蕪すし ありや上戸の客まり 上 玉 桂
 とせの香竹添りぬ人き 和の月 嶽 琴
 梅の香竹添りぬ人き 和の月 松 少
 眠る時 此の席を 屠蕪の辞 空 海
 中少座を傳り儀 客を人き 屠蕪の辞 未 曉
 屠蕪の香竹 一日退るぬ 和心 芝 山
 とせの香竹 和の月 屠蕪の辞 梧 栖
 屠蕪の香竹 和の月 屠蕪の辞 祥 松
 屠蕪の香竹 和の月 屠蕪の辞 桂 月
 命を傳りぬ 和の月 屠蕪の辞 羽後 静 海

屠蕪の香々姉
 孫児を膝抱
 破たれや猪刀為をん
 とその香
 とその香々姉
 何るもこれこれ
 下戸ありと癖
 下戸ありと癖

若餅

若餅や賑らせし
 白の巻ひ初め
 若餅や賑らせし
 白の巻ひ初め

常陸 仙美
 江 花の中
 無 葉 曉
 陸中 香 峰
 祥 松
 礪 磯
 松 月
 柳 下
 梧 風
 静 浪
 唯 風

若餅や賑らせし
 白の巻ひ初め
 若餅や賑らせし
 白の巻ひ初め
 若餅や賑らせし
 白の巻ひ初め
 若餅や賑らせし
 白の巻ひ初め
 若餅や賑らせし
 白の巻ひ初め
 若餅や賑らせし
 白の巻ひ初め

常陸 仙美
 江 花の中
 無 葉 曉
 陸中 香 峰
 祥 松
 礪 磯
 松 月
 柳 下
 梧 風
 静 浪
 唯 風

知掃深金河ト一あき人ねの内
碓の好日毛なとて色一好孝の内
おとま一い言葉さし中ねのち
抱し目毛あよも一ねまの内
頑是あし一子毛好起中孝の内
弟の一くうまら一あらの内
いり好灯中百毎一ま中ねの内
琴の音一帯屋の片一まの内
好くも骨の中ねく一ねの内
僕もも愛さ一ねまの内
四はそれる者一目もあ一ねの内
美い音得るか一色好孝の内

羽張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張
羽 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張
羽 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張
羽 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張

春神祇

神垣中人とそまのま子あは
分下音の勇む中善の仔勢詣
のくまを初まの好ま中神まうて
神垣中梅のうまりも唯自ら
若錦中神代のま一山ね家
中代の神も小まら中野の社
野祠中まうも善の人せうれ
若錦中ねのあら人もりま目
拍多中一つれも白中神の梅
多中も一初も房たれね好着中
保子良子中仔勢まら一も梅の花

尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張 尾張
羽 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張
羽 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張
羽 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張 尾 張

初年

初年や世川の橋が清く初
 初年や今の地主も囉——好
 初年の船や子供も遊ばす
 初年や春のや海も中家文
 初年や萩の小家も客のあ
 初年や心と舞うも 誠 歌
 初年やや隣りの留守も新ま
 初年や心と日田畑の人を
 初年や流石のま子の人通
 初年の世柄もや老仲間
 初年や子の晴も書く誠 懺
 羽前
 苦 岩 喜 可 連 友 香 赤 香 山 山 山
 草 雪 雪 山 山 山 山 山 山 山 山
 年 雪 雪 山 山 山 山 山 山 山 山

初年や小里も人々の好
 けつしや魚の市場の早仕舞
 初年や押された暦も多
 初年や釣るの漁も人の中

餘 寒

夕風や余りの花も星の
 近うれい餘りもつば 能
 猫は舞うも子も余りも餘り
 掃除して餘りもゆも
 着たて餘りもゆも
 月おちたつてもお好餘り
 まけお音もお好餘り

小 橋 梅 芳 歳 曲 祥
 女 舞 毒 小 梅 芳 歳 曲 祥
 横 濱 狸 三 松 月 窟
 羽 後 三 松 月 窟
 風 静 雪 坂 客 齋 史 律 年 朧 松

山にゆく遊んで 高き 雉をくらす 東京
降る程に 貴族子孫と 余をくらす 逸
蘇垣の 結き 一とある 一何んぞ 亭
只の 山に 遊ん 借梅の 余をくらす 春
流れ 赤子 稚らや 余をくらす 根をくらす 雪
野に 色を 付て 雉をくらす のゆく 古
切法 傳き ます 雉をくらす も 余をくらす 源
恙 山に 稽の 笑き 一何んぞ 伯
先く 山に 遊ん 借梅の 余をくらす 梅
温る 山に 遊ん 借梅の 余をくらす 末
新ハ 星の 光り 山に 遊ん 借梅の 余をくらす 祥
光り 山に 遊ん 借梅の 余をくらす 友
山に 遊ん 借梅の 余をくらす 山

逸 朗 物 外 亭 雀 春 喬 古 文 源 葛 伯 志 梅 松 末 曉 祥 友 山

知風呂のさき 雉をくらす 知る 余をくらす
力ある 音や 余をくらす の 山に 稽
緜き 山に 遊ん 借梅の 余をくらす
かこもつて 所を 見ゆ 雉をくらす

鳥 巢

巢に 通ふ 鳥をくらす 高き 如 椽 柱
鳴く 鳥をくらす 巢をくらす 一とある 親
鳥の 巢や 山に 遊ん 借梅の 余をくらす
鳥の 巢や 高き 山に 遊ん 借梅の 余をくらす
巢の 鳥や 人 親を 借梅の 余をくらす
親の 鳥や 鳥を 借梅の 余をくらす
鳥の 巢の 鳥や 海を 借梅の 余をくらす

我 松 尾 律 芳 琴 月 静 淇 山 泉 一 鳥 身 牙 羽 木 瓶

正五

巢の育つて多きなり
 巢の多きそよのた育つや松の巨連
 多き巢をそよのた育つや松の巨連
 多き巢や ぬくぬれハ 立ちあぐ
 巢を立ち 日うつ屋根樹の影れ
 啼けり 立ちあぐのた育つや松の巨連
 多き巢を立ち 日を待たぬ根樹
 とくすや ぬれぬれハ 其たぐ
 多き巢を立ち ぬれぬれハ 其たぐ
 恥づ 立ちあぐのた育つや松の巨連
 多き巢や ぬくぬれハ 立ちあぐ
 多き巢を立ち 日を待たぬ根樹
 多き巢や 子供をく目のまいる

東京

皆川
 白人
 柳所
 連芳
 近山
 所山
 杏岳
 梧栖
 黙火
 一翁
 花翰

首の 育つて多きなり
 多の 巢や 宿りぬれうらぐ
 小多の 不や 巢を立ち ぬれぬれハ 其たぐ
 音を立ち ぬれぬれハ 立ちあぐ
 海の 岸を立ち ぬれぬれハ 立ちあぐ
 赤い山 立ちあぐのた育つや松の巨連
 掃忘れぬ 影の育つや松の巨連
 宮の 文を立ち ぬれぬれハ 立ちあぐ
 行居や 立ちあぐのた育つや松の巨連
 江の水を立ち ぬれぬれハ 立ちあぐ
 入船や 立ちあぐのた育つや松の巨連

歸 鳳

友山
 芳律
 文禮
 松弘
 三都里
 羽前
 柳風
 羽後
 玉山
 里山
 松山
 蘭月
 唯雨
 風

丁より此海より我ハ切
 炸の海をさなる船中
 淋さるる心さるる離れ
 船室やさるる下海層
 水層の方を斜や船の月
 さいの毛路のさるる海
 海さるる知らぬさるる
 行さるるや明月層さるる
 降さるるの雨さるる船
 水層や廣さるる炸中塞さるる

春風
 春風の吹ふやさるる池の水

芳 連 樵 梅 洪 吳 梅 芳
 糸 連 翁 元 電 園 侯 侯
 親 和 下 依

春風や東海道の人通
 春風の吹ふやさるる龍の音
 音程の吹ふさるる吹ふ
 春風や東海道の白
 けさるる吹ふさるる船の解
 春風や船の海の上を吹
 春風の吹ふさるる船の音
 春風の吹ふさるる旅日記
 春風や船の山
 春風の吹ふさるる野さるる

相模 芳泉
 横濱 梅 芳
 兵庫 侯 侯
 京都 侯 侯
 越前 侯 侯
 加賀 侯 侯
 富山 侯 侯
 石川 侯 侯
 福井 侯 侯
 山梨 侯 侯
 長野 侯 侯
 岐阜 侯 侯
 愛知 侯 侯
 三重 侯 侯
 滋賀 侯 侯
 京都 侯 侯
 大阪 侯 侯
 和歌山 侯 侯
 奈良 侯 侯
 徳島 侯 侯
 香川 侯 侯
 高松 侯 侯
 愛媛 侯 侯
 高知 侯 侯
 福岡 侯 侯
 佐賀 侯 侯
 長門 侯 侯
 肥前 侯 侯
 肥後 侯 侯
 豊前 侯 侯
 豊後 侯 侯
 大分 侯 侯
 宮崎 侯 侯
 鹿児島 侯 侯
 沖縄 侯 侯

やまのれハ強クも吹くハ春の風
春風のゆきまら〜和船出浦
吹れ〜田舎ハ眠る気まの風
春風や吹付ハむせる辛子白
吹け〜さきまの〜うらハ春の風
あし作ハまの檣橋〜まの風
春風やま〜吹くも〜増え
春風やま〜春風ま〜鈴〜
何處へま〜人え道〜春の風
負〜〜まの檣橋〜まの風
舞〜〜田の傳〜春のうま
株上の幣〜いらは〜まの風

東京
皆大長秀蘭森祥俱碌奔晚楮
川笑宮川雨峰松園月系梨栖

舞〜〜まの綾〜まの風
暫〜〜まの〜やまの春の風
春風〜〜皆向〜〜都〜

春水

深殿の盃盤〜ま〜まの水
舞〜〜まの〜まの春の水
流れ〜〜〜春の水
まの水杖〜〜方〜流れ〜
ま〜ま〜春〜まのま
お座や〜〜ま〜まの水
まのま〜〜〜まの流〜
解け〜〜〜氷〜まの水

上都 芳文 其
榊 琴 門 律 禮 燭
仙 美 哉 川 麓 三 村 琴 門
仙 美 哉 川 麓 三 村 琴 門

音をたゞしけりしあふれりし春の水
夕の霞より残る母のあふれりし水
まぢれりや水を濁れりすこゝの川
飛の雀ふ飛のたふや春の水
靴も首ぬりしは未だ秋のあ
おのちの流れてやまの春の水
杖先よりたふりしは未だ秋のあ
うらみのあつてりし春の水
心地よき流れてやうは春の水
疾くくは舟借廻りしは春の水
田のあつてりしは野面や春の水
月影の宿れりしは

杏 暮 晚 翠 芝 山 酥 月 吳 雪 淇 園 梧 風 聽 泉 一 風 泉 公 法 梧 木

仔橋の流れさうくもるのあ
暮の水煙る山より流れりし
流る水さうくもるのあ

雪解

旅人の踏まれぬる雪解き
煙りしは未だ秋のあ
雪解の曇りしは湖の上も傳る
子供らう世話をやうする雪解
種物を穿りしは未だ秋のあ
桜川に雪のあつてりし雪解
雪解やうつた場は皆る海舟
暮烟く免れりしは雪解

素 白 梅 柳 芳 律 唯 風 木 風 月 静 本 翁 桂 月 芳 木 連 芳 木 儿 連 堂

雪解や修るもなほ雪戸の山
二重目の漱の音はゆりく雪解は
野の色は増て高峰の雪解は
雪解の音もく又ゆりく海はな
ゆり山は曇りくも遠く雪解は
雪解やま軸よりけ 旅の
雪解の濁りもゆりく 芳野川
雪解や日知らるる雪解は川の水
雪解は 指のしれく雪解は
雪解や羽ゆきあり記懐の
ゆき解や月と隈もす 池の面
雪解は 雪解は 雪解は

嶽 琴 都 美 逸 水 白 水 遊 雅 樂 友 晚 翠 筒 溪 吳 重 一 扇 岱 太 京 面 茲 垣

雪解の濁りもゆりく 芳野川
雪解は 指のしれく雪解は
雪解や羽ゆきあり記懐の
ゆき解や月と隈もす 池の面
雪解は 雪解は 雪解は
雪解の濁りもゆりく 芳野川
雪解は 指のしれく雪解は
雪解や羽ゆきあり記懐の
ゆき解や月と隈もす 池の面
雪解は 雪解は 雪解は

松 塢 寸 芳 山 喬 具 尤 素 水 芳 律 文 禮 在 山 柳 下 琴 芳 丘

下 甘 圃

下萌の魁ら〜や萃既
 下萌のや多う端信も腐む出
 下萌のやあも多枯葉の何も出ら
 下萌のや多う多と成れ〜水の音
 下萌のや解く借あられ好葉垣根
 下萌のや濡土福く〜繁き草
 下萌のや吹られさ〜も 萩花
 下萌のや追けれハ従 蕃の庭
 下萌のやあも汚れ〜鶯の鶯
 下萌のや多う多〜も 風の音
 下萌のや海〜下れハ長原も
 下萌のや其下萌も花の色

井月 児堂 樂友 貫山 可山 法泉 來曉 晚翠 點史 狸客 寸芳 文禮

下萌のや萃のあき新 再の次

獨活

山多のち〜と〜と 獨活白
 獨活の芽や深山の多も眼はも
 独の柄も多う〜と白く独活芽は
 多知も初はひ〜と〜ととあは
 独活の芽の育ら島白ひ〜と
 多〜と〜と〜と〜と 獨活の紅
 多の多も〜と〜と 獨活の白ひ〜と
 刻き〜と〜と白ひの余も 膳の上
 入院式のひれハ伸新獨活芽は

草餅

芳律 唯風 聽泉 桂月 三都里 儿堂 山喬 芳律

乳の何〜〜野の味も草の保
船人の老ら〜〜山と竹の餌
盛上〜〜み〜〜の山と竹の餌
草の保も京の田舎のな〜〜池
初〜白の船と軒〜〜草の保
草〜〜も〜〜海〜〜草の保
竹の保も揚げ〜〜ま〜〜色
草の保も〜〜も〜〜保
草の保も〜〜色〜〜保
保も〜〜客〜〜ら〜〜保
竹も〜〜や〜〜日〜〜保
揚上〜〜り〜〜保

唯 木 丁 聽 三 清 梅 香 逸 琴 空
風 扇 鳥 泉 梧 汲 松 史 峰 水 我

草の保の色も〜〜掛帛紗
竹も〜〜や〜〜盆〜〜保
時〜山を〜〜好色も〜〜保
草の保の〜〜も〜〜保
色〜〜香〜〜味〜〜外〜〜竹の保
座〜中〜傳〜保も〜〜草の保
揚〜〜上〜〜香〜〜度〜〜竹の保
野〜自〜色〜も〜丸〜〜色〜〜保
色〜〜瓦〜〜紅〜〜入〜〜竹の保

雛

えせ〜〜雛も旅籠の馳走
山里や梅咲六らの雛まつり

身 士 琴 嶷 竹 蘇 筒 皆 芳 唯 弄
川 行 芳 琴 溪 月 溪 川 律 風 山

雛立ちて参らうと子也行義これ
 之を飛ぶや雛と心をもとやうに
 灯ともせ候皆集うや雛の茶
 子心よりけりまきりひは祭
 位子より勝れぬもの雛の前
 雛の箱添状も之は閑多り
 子の初志をとりて飾るや雛の棚
 綿飾り管恋種ふひは女客
 言葉も傳あうたまふ子や雛の前
 曠着して多傳ふ雛の料理は
 金屋中 雛の籠
 年毎子ふやまや雛の相の形

羽後

井 左 児 歳 友 如 柳 公 秀 貞 文 山
 月 堂 琴 山 風 瓶 木 川 身 通 山

稚子の名を記し けり 雛の籠
 之心中 雛の籠 けり 雛の籠
 傍人飾るや 母のふるひいな
 年々 進むや 雛の細子あり
 雛飾り 飾りて 雛を 結ぶ 雛舎
 雛棚や とも 火をとも 雛ひ
 雛市や 雛のやうなる 雛あり
 紙雛や 着らぬ 雛の 教ふ
 古いのもあつて 目も 雛う
 雛の 雛の 雛の 雛の
 雛の 雛の 雛の 雛の
 雛の 雛の 雛の 雛の

お白

文 啓 羊 柳 雛 吾 一 氷 清 弄 吳 左 左
 啓 羊 柳 雛 吾 一 氷 清 弄 吳 左 左

三三

流りし方うらな雛の底夢うら
親乳の多産も 曠ふ 幼雛
子福者お曠うらま さらし布り雛
心嬌ひのうら 海うら 雛の市
眼うらうら 賞おくれ 市お雛
雛市やうらうら 新瑞の早灯
又母の昔 具の原より 雛まつり
襦ろし 汁さし 害あり 雛の前
雛持しうら 糸うら 島道
物し 眼のおもてお 雛子 蓬き
旅し ともも ありうら 蓬山 蓬

豊前
瓢 来 黙 晚 楽 才 左 芳 吟 風
種 曉 史 翠 友 芳 宜 律 泉

素む日や 吹くくきき 蓬の友
眼し 露 耳し 素や 素お蓬
鞍きし 眠 意はくや 蓬き
蓬きむ日や 海の面
素のほろ 好月も 素む蓬
持し力 是ら好やうらうら 蓬
素むらや 上野の蓬 中うらす
素を 白く 吹くハ素むや 素の蓬
田の水 泡くく日く 蓬くすむ
笠従 借 問の 素の 名や 蓬き
庭 踏 借 眠 意 是 素ん 蓬
蓬きむ 野 小 脊 原 了 素 益 飯 蓬

高橋
里 友 連 逸 晴 雙 玉 儿 左 晚 想 冬 嶺
山 山 水 月 松 桂 堂 翠 翁 嶺

蓬二

金河をくぐりて撞くもあらし霧に霞
霧にやらの吹り雪の降るの交り
うすむ境松の葉はく雪のうすり
赤雲や霧をくもれてうすの声
つひきと傳揚るもききし霧に霞
霧のうすむやうなる音も山に霞

佐保姫

佐保姫や通る小路も縁も
さゆ姫やうらもをくもる山に霞
佐保姫やまはりのなきし松葉うれ
佐保姫や更書てくたき山に霞
佐保姫の浮名流るる舟に霞

東京
舟
丹
芳
其
皆
左
寸
可
芳
律
其
花
川
芳
荻
泉
風
本
木
風
松
如
風

佐保姫の裾やいさらん松の葉
佐保姫や松を揺るの縁も
佐保姫や海くまの舟に霞
さゆ姫の懐もくもる山に霞
佐保姫や霧の
佐保姫や霧の
さゆ姫の袖枝とわさ保の松
佐保姫やうすむ山に霞

名所花

曙の里にうらや花の道
上野うら踏もめり花の道
花のうら踏もめり花の道

桂
漢
一
澄
皆
古
芳
以
月
陰
芳
律
松
川
月
荻
嶺
園
月
以
月
陰
芳
律
松
川
月
荻
嶺
園
月

茶を好む連名ありて一隅田の
 花をよみての息にや嗟嘆の道
 小金井や清水濁も花は家
 流るるに流るる花あり吉の川
 晴る程よ一里の花を曇るる
 杉うらもあらし来る花は荒山
 花のせう下り符や一土堰川
 富士下り花を曇る花の吉壁山
 切山強き花の夕日の入佐山
 隅田の長花の堤ありしかり
 昔人の愚かしう国や新く花
 ちの花を活て健なり

芳皆可感一和花近喜連梧桂
 律川芳年翁親鞆山我山風月

桃花

花の村の家より花
 柳の枝は揺る日和を曇るる
 人形も花
 名は着るる生ひあかりの
 花の咲時ハ錦賣るる在所
 花の咲て紅梅の牛の身保るる
 花の咲や所をはなれて花の
 花の咲を花の心も花
 花の咲も花の心も花
 花の咲も花の心も花
 花の咲も花の心も花

肥後
 羽後

素柳蔭文貫祥吳来芝梧芸
 白下山啓山松空院山栖棠

花のつぼみ生くあつちや桃の花
 名はなきは田舎のつらつちや
 花のつぼみ生くあつちや桃の花
 村の底に葉肉のつらつちや
 何となく家を暖かきつらつちや
 花のつぼみ生くあつちや桃の花
 牛の背に生くあつちや桃の花
 酒のあけや生魚のつらつちや
 苦桃と思ひぬあつちや花の糖

海棠

海棠のあつちやつらつちや

嵩 山
 玉 山
 松 山
 葉 声
 寸 芳
 其 右
 岱 右
 芳 右
 文 禮
 帝 峰

海棠のあつちやつらつちや
 海棠のあつちやつらつちや
 海棠のあつちやつらつちや
 海棠のあつちやつらつちや
 海棠のあつちやつらつちや
 海棠のあつちやつらつちや
 海棠のあつちやつらつちや
 海棠のあつちやつらつちや
 海棠のあつちやつらつちや
 海棠のあつちやつらつちや

梅木

芳 其 氷 梧 黙 瓢 筒 淇 聽 貞 嵩
 緯 獨 柯 栖 丈 種 溪 園 泉 牙 川

減り梅より薄の柿の穂も
世傳りハ下子存疑して梅あり
六ツか〜く時了仕舞子〜梅あり
子ふかり新あり〜梅あり
窓のく〜梅あり〜梅あり
校庭の上中梅穂〜 暮 庭
梅あり〜花席に梅あり 鶴の垣
減り〜梅あり 梅あり 余り梅
之造り〜梅あり 梅あり
梅あり〜梅あり 梅あり
〜梅あり 梅あり 梅あり
梅あり〜梅あり 梅あり

上 先
未 曉
晚 翠
吳 水
芝 山
吳 舌
全 楸
大 檜
琴 芳
聽 泉
桂 月
連 柳
蒼 柳

梅あり〜花席に梅あり 鶴の垣
減り〜梅あり 梅あり 余り梅
之造り〜梅あり 梅あり
梅あり〜梅あり 梅あり
〜梅あり 梅あり 梅あり
梅あり〜梅あり 梅あり
小刀を先巻巻ら〜梅あり
苗代
苗代〜梅あり 梅あり
苗代〜梅あり 梅あり
苗代〜梅あり 梅あり
苗代〜梅あり 梅あり
苗代〜梅あり 梅あり

横 侯
香 海
丹 蓉
東 京
曾 保 都
文 禮
芳 科
一 翁
吳 雪
都 美
一 香

苗代を 家か 出る 大橋人
苗代に 五月廿五日 田
糖 雨を 六月廿五日 苗代田
苗代、田、小景色、く、く、く、く

蛙

其中に 泥の あり 蛙 鳴
又 雨に なる 音 蛙 鳴
田の 水に 連なる 蛙 鳴
泥に 傳ふる 蛙 鳴
春を 迎ふる 蛙 鳴
竹の 影に 蛙 鳴
行旅を 迎ふる 蛙 鳴

山 在 全
生 在 全
毒 在 全
芳 在 全
風 在 全
蘭 在 全
春 在 全
美 在 全
友 在 全
尾 在 全

粒を 迎ふる 蛙 鳴
田を 迎ふる 蛙 鳴
春を 迎ふる 蛙 鳴
竹の 影に 蛙 鳴
行旅を 迎ふる 蛙 鳴
泥に 傳ふる 蛙 鳴
田の 水に 連なる 蛙 鳴
又 雨に なる 音 蛙 鳴
其中に 泥の あり 蛙 鳴

樵 白 梅 晴 松 樵 樵 可 一 樵 樵 樵
翁 水 元 月 少 村 童 和 山 花 秀 秀 秀
樵 白 梅 晴 松 樵 樵 可 一 樵 樵 樵
翁 水 元 月 少 村 童 和 山 花 秀 秀 秀

降ぬの音よりききし 月夜
ふと耳のこもきき音なり初蛙
月のこもりてしとて 田の蛙
通り雨ありて蛙の月夜
門田より啼きゆくやうに蛙
葉の戸や蛙のこもりの中
花の音のききし 月夜
水音のききし 月夜
老の脚 止て舞る 蛙の音
田の音 けいこもりて蛙の音
蛙の音 けいこもりて蛙の音
月夜 照らされて 蛙の音

葉 声
涼 蕙
吾 馨
黙 史
一 水
洪 翁
在 園
格 栖
竹 溪
文 禮
芳 律

雀子

雀子月 立ちも嬌しき 日影うれ
あつとふ知あつとふ 雀の子
雀子に 細猫 何る戸はうへ
雀子の 羽を 見る 雀の子
あつとふ知あつとふ 雀の子
雀子や 雀の 羽を 見る 雀の子
雀子 立ちも 嬌しき 日影うれ
雀子 立ちも 嬌しき 日影うれ
雀子 立ちも 嬌しき 日影うれ
雀子 立ちも 嬌しき 日影うれ

信濃

雀 子
如 琴
永 如
梅 永
鳳 如
聽 永
公 梅
素 鳳
白 聽

萱子と先んけりき。新編の甲
まゝ免子のちか。く之新まれ
甲乙のまの育ち。萱の子
物怖も知あつて。うちを在女子
萱子やまの清き。まの枝編
目もあつて。うさう。や萱の子
まゝ免子の。うさう。之のけり
まゝ免子の。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子

松 風 泉 月
帝 峰 梧 松
杏 翁 菴 柳
一 翁 菴 柳
點 史 月 翁
蕙 菴 柳 菴
丹 涼 菴 柳

まゝ免子の。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子

鹿落角

まゝ免子の。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子
まの。まの。まの。萱の子

其 獨
芳 緯
友 山
香 川
松 言
松 月
真 身
清 梧
以 考
文 通
洪 山

水色も高く流れて 岩つりし
苗さす 水中に 流しし 下流
惚るく ちり 夕日 赤い 脚
紅葉 小川 夕日 赤い 脚

茶 指

さる人を見ても 呼く 茶指
茶指 ちり 指ぬ人 茶指
通る人 之向方 ちり 茶指
ちり ちり ちり ちり ちり
さる人 ちり ちり ちり ちり
茶指 ちり ちり ちり ちり
茶指 ちり ちり ちり ちり

一 本 凡 三 月 本 唯 芳 丹 寸 祥
音 翁 泉 汲 静 風 凡 律 芸 芳 松

大連の 日高 ちり 茶指
明子 伝 ちり ちり 茶指
福 ちり ちり ちり 茶指
白 ちり ちり ちり 茶指
里 ちり ちり ちり 茶指
指 ちり ちり ちり 茶指
連 ちり ちり ちり 茶指
二 番 茶 八 年 茶 ちり 茶指
明 ちり ちり ちり 茶指
指 ちり ちり ちり 茶指
明 ちり ちり ちり 茶指
指 ちり ちり ちり 茶指

上 包
寸 花 玉 一 曲 瓢 吳 杏 桂 如 香 芝
芳 翰 桂 誠 朧 種 音 菴 月 凡 峰 茶

茶をたのむるもふもて透す柔腸が

雑春

ゆき水に似て居るうらむ善光寺
大連の道者も善光寺善光寺
賜ふ余も善光寺聖人山人
初らうらうらまふ善光寺庭道
海うらうらたゆり持たう善光寺
梅もさうあまや梅も 向書
善光寺麻ふも麻善光寺うら
善光寺旅あまひの舟のり船も
いさうのいさうも持たう善光寺
本母寺も梅も日暮人のけりも

芳 律
吟 凡
月 静
穂 泉
春 川
如 身
送 水
未 曉
黙 史
映 翠

善光寺中房れハ座下 善光寺
善光寺一 似て善光寺
善光寺中 之善光寺
川 揚も 梅も 善光寺
持たうも 梅も 善光寺
里 善光寺 善光寺
引舟の揚も 善光寺
日 善光寺 連面也 旅の善
善光寺 善光寺 善光寺
善光寺 善光寺 善光寺
善光寺 善光寺 善光寺

善 香
一 香
所 翁
吳 羊
空 羊
近 山
美 柳
白 人
芳 律
文 禮

善光寺

法樂の段は遠く一善の名強は
夕風らとてあまの春は名強は
伊とてあまの春は名強は
けりまのせりくを續く天気が
汚れたる御洋を春は名強は
孫心もあまの春は名強は
山里もあまの春は名強は
善和の少袖を春は名強は
向うの柳もあまの春は名強は
手枕傳るあまの春は名強は
古堤の春は名強は
けりまの春は名強は

其 淇 芝 吳 蘇 海 祭 一 友 桂 月 唯
宅 園 山 宅 月 三 弘 誠 山 月 務 凡

不さるれを初まぬ善の名強は
とてあまの春は名強は

龍

あまの春は名強は
二市に六の春は名強は
市中に市とあまの春は名強は
あまの春は名強は
あまの春は名強は
あまの春は名強は
あまの春は名強は
あまの春は名強は
あまの春は名強は
あまの春は名強は

友 桂 聽 茲 以 橋 柳 嘉 吟 芳 文
山 月 泉 山 春 凡 下 峰 凡 律 禮

早稲のまいり子降る油を
 とやすや多穂の低の初と休
 子稲や山をさるるん美明
 早すやあつちのさる別る客
 子とや客をさるる一候
 とや稲や月のあつちの初と休
 早稲や山と川と水間の宿
 早稲やりのさるる一候
 子稲のさるる一候と紅生毒
 稲の香も茶も香も何となく
 稲をぬるるち水稲。産あるを

東京

古松 一歳 梧 芒 映 點 末 清 香 洲
 致 芳 梅 玉 永 樵 白 井 川
 松 香 洲 海 泉 院 史 翠 山 栖 年 如 官 丈

早稲やあつちの降るののあつちの
 風能や子稲のさるる一候と
 子とやあつちのさるる一候と
 早稲のさるる一候と梅史
 稲の香も茶も香も何となく
 稲をぬるるち水稲。産あるを

粽

古松 一歳 梧 芒 映 點 末 清 香 洲
 致 芳 梅 玉 永 樵 白 井 川
 松 香 洲 海 泉 院 史 翠 山 栖 年 如 官 丈

牽り抄り付て 糝水俣し
 糝~~~~子先や知り居らん地
 乃つ今縁ひしとほく糝水
 習く事傳はしとてたちまは
 船毎り糝配るや船間有
 歌々吹の間傳しちまは
 温泉より水皆解き急く是糝
 昔のよりいづくの飾り糝も傳
 きよふも傳はるき色や色糝
 糝
 糝の意は糝も眼のこころなり

月 陰 文 芳 嘉 梧 芝 箭 長 貫 洲
 靜 風 禮 拜 齋 栖 山 溪 言 山 巖

糝もなつてよ人の知る 跡糝は
 跡糝のよ糝たるのあられり
 青梅やとつとつとつとつとつ
 ものよとつとつとつとつとつとつ
 青梅やとつとつとつとつとつとつ
 も糝も糝よとつとつとつとつとつ
 青梅よとつとつとつとつとつとつ
 青梅やとつとつとつとつとつとつ
 青梅やとつとつとつとつとつとつ
 青梅やとつとつとつとつとつとつ
 青梅やとつとつとつとつとつとつ
 青梅やとつとつとつとつとつとつ

甚葉

芳 嘉 祥 曲 奔 繁 繁 如 友 本 本
 緯 觀 松 朧 系 弘 松 鳳 山 鳳 箭

其葉や照れは花より葉の薫り
 多菊や奇麗好む人せせせ
 けしきや重宝されて高潔き
 多菊や華彩のつくまき尾の庭
 其菊は皆眼のまきや市の人
 不威ふや風も吹ぬ葉の揺り
 うら葉や灯火もくく伴縁簾
 其葉の皆白くれと物いりり
 多菊やさうな存 惜る 香牛よ
 けしきくく斗りや花の名も知れん
 多菊や 極み火のりき煙多窟
 羞いらや多菊けしきも極みある

友 連 井 琴 仝 俱 告 奔 晚 黙 未 梧
 山 月 芳 園 窓 糸 翠 史 曉 栖

其葉の菊よもあるや 如く花の薫り
 多菊や 是れさうらけのともなふ
 多菊や 盗まれさうな極と云
 多菊の 照まけもせぬ白いさ
 けしきや 如きくく のも香い
 其菊や 是れ日脚の薫る 窓
 多菊よさうらや ちり小庭に

苔の花

文 本 法 唯 芳 林 貞 木 一 以 仝
 通 風 格 風 祥 雅 身 風 香 香

志を井つ水音清——苔は花
 苔の空若くもさかむ木の根は
 きくつハ口は海多や苔の花
 苔の外路ぬところや苔の花
 本の中のもの多や苔の花
 碑をたれハ枕字もかろや苔の花
 古井戸やまらぬ絶くは苔の花
 志はまらぬ海は霧や苔の花
 海裏く也れハ音——苔の花
 以ハ第一もあまらぬ苔の花
 松をももる日もまらぬや苔の花
 戸櫃傳くも水の味も——苔の花

桂 連 一 都 可 蒼 真 寸 筒 梧 曲
 月 琴 識 美 山 柳 松 芳 淡 栖 朧

碑の文字は清くもさかむ
 水打て月も見ぬ好音も
 筒井は井つや苔の花盛る
 素徒は傳水清くもさかむ

薬玉

薬玉もうけ了家梅のまき
 薬玉も人の眼は清くもさかむ
 清くもさかむ薬玉も白くもさかむ
 薬玉の影も清くもさかむ
 薬玉は香も立借も度家
 薬玉も昔も清くもさかむ

朱 湛 文 芳 赤 文 祥 未 飄 一
 暁 園 禮 律 峰 通 月 松 暁 種 和

藥玉や旭中 一のまゝの薬玉
美玉や 為替んはるる 一のまゝ
とすや 昔ゆうき 恒ひり
美玉や 京の四 一のまゝ

圓扇

かり湯の業肉うまろく 圓扇が
湧きこころみろく ち風うまろく
風をそよふまゝとまゝ 圓扇賣
山の名をまゝ知らまゝ ちいり
海舟 一と大ききまゝ 圓扇のな
椀笠の外は訓 旅うまろく
偏りのなきまゝ 一のまゝ

洲 可 香 芳 唯 香 蘭 松 淇 聽 桂
巖 芳 海 律 風 川 雨 号 山 泉 月

這うしてまゝとまゝ 一のまゝ
来る程、皆圓扇なり 一のまゝ
釣魚せ 一のまゝ 圓扇のな
本船小 圓扇 揚きまゝ 船
揚る人 一のまゝ 一のまゝ
道中、一のまゝ 一のまゝ
風をそよふまゝ 圓扇 揚きまゝ
圓扇のな 一のまゝ 一のまゝ
一のまゝ 圓扇のな 一のまゝ
配りまゝ 一のまゝ 一のまゝ
舟の人 招く 一のまゝ 一のまゝ
一のまゝ 一のまゝ 一のまゝ

友 山 左 年 感 栖 晚 翠 點 史 左 杏 毒 琴 芳 儿 堂 竊 琴 岳 嶺

人中に賜ふる聲也 清高廟
持て居て居たうきうきうき
結尾廟やうきうき江戶
朝之井 夢て休るるうきうき
清高廟と居たうきうき
之うきうきうき清高廟
廟持て居るうきうき

蚊

蚊の聲やうきうき池うきうき
軒老うきうき禁て居るうきうき
佛檀うきうき蚊の聲やうきうき

祥 貞 寸 其 丹 皆 芳
松 芳 尤 茗 川 律 風 風 風

蚊の聲やうきうき池うきうき
軒老うきうき禁て居るうきうき
佛檀うきうき蚊の聲やうきうき

貞 柳 香 樵 雙 貫 逸 晴 儿 嶽 蒼 歲
芽 下 峰 翁 松 山 水 月 堂 琴 柳 年

故程の立や動うね水の上
蚊がまの中たりたりの小舟
人の子かて写物も海の小川
れ
舟の舟をまたる。心平橋の上
算をよむ世海。舟も舟書らう
舟の好は柳ももも。新船の
舟の群る。板間や音のさるれ酒
唐草歩向く馬や舟の唐好息き
舟の好は舟のうん園を尋ん
蚊がまら好うらもも。心舟は
さ。舟の舟をまたる。舟の舟は
舟の好は舟のうん園を尋ん

皆 左 左 貞 左 吳 梧 未 曲 芝 杏 吳
川 松 寺 栖 曉 朧 山 窓 寺

追を舟より啼く好蘇好もさる危
心くまの舟も舟も舟も舟も
群れる舟も舟も舟も舟も。椎の洞
堂も舟も舟も舟も舟も。舟も舟も
好き好き。好き好き。舟も舟も
好き好き。舟も舟も。舟も舟も

蝙蝠

蝙蝠の好も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も
舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

左 洪 梅 儿 芝 文 芳 其 其 古 寸
周 元 堂 我 禮 拜 獨 心 松 芳

人も灯を便下 暮るも身の中
雲の影に迷つて来たる夜も
灯の影も 夕暮の影も 出

花蟻

白りりのやまをくぐる 花蟻が
ゆきよのうらみ 花蟻の
さくらさくら 花蟻の
さくらさくら 花蟻の
さくらさくら 花蟻の
さくらさくら 花蟻の
さくらさくら 花蟻の
さくらさくら 花蟻の

筒 瓢 原 芳 月 淇 文 几 洲 士 連
漢 種 蒼 律 山 啓 堂 巖 行

ちりちり 花蟻の羽が
舞う 花蟻の羽が
舞う 花蟻の羽が
舞う 花蟻の羽が
舞う 花蟻の羽が
舞う 花蟻の羽が
舞う 花蟻の羽が
舞う 花蟻の羽が

暮林

暮の静けさ 夕暮の静けさ
暮の静けさ 夕暮の静けさ
暮の静けさ 夕暮の静けさ
暮の静けさ 夕暮の静けさ
暮の静けさ 夕暮の静けさ
暮の静けさ 夕暮の静けさ
暮の静けさ 夕暮の静けさ
暮の静けさ 夕暮の静けさ

樵 翁 一 杏 梧 左 丹 芳 白 友
翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

田植

いさぎ足ん垣外ハ田を植へ声
降らぬ日の笠をかぶせ 田植
植へ田の町中を歩む馬の用
植へ田の月大気味よき銭ころも
汗あふてさひくさきう 田植
習ふううなれても早き田植
風よあふ油子もあふ田植
船よ植へ田をさる眼よはく
ぬきひと結せくはらき田植
手よさるぬきもあふ田植
簾笠のぬけ目かたき田植

唯 本 風 如 桂 梅 樵 玉 都 儿
風 泉 風 月 瓶 翁 我 桂 美 堂

子小まほ方笠着せて田植
田を植へぬきううぬきう音
植へぬきぬき生あふ子方田の所れ
田の色や白く遠ひの植境ひ
濡あうらぬきはあく田植
植へ田小月曇る海うり
曇るゆりうりぬき早き田植
ゆりうりぬきうりぬき急
夕月とを植境田所植
植へ田を植へぬきう
立月日初らぬき

逸 香 吳 曲 芝 晚 可 白 文 芳
水 壺 香 雪 腕 山 翠 山 人 禮 琴

氷室

氷室身

氷室身

新の明ぬらふに氷室高を通りけり
足舟山の深きも物も一氷室の舟
氷室守りしき思ふに松原の松
昔や故の昔方ハ知れず氷室守
今も昔も風も波も氷室守
或る船もやのしきもいづれに
眉の痛むけりけり氷室守
氷室山言ふる峰へ縋きしき
舟もよも深き氷室守
心も憂別れぬけり氷室守

蟬

蟬鳴りや志きりけりけり松の脂

友 芳 有 以 苑 松 去 可 葉 洞 儿
山 緯 儀 孝 鶴 虬 柳 山 柳 梅 堂

戸柳舟の舟海にけり蟬の夏
蟬鳴りや志きりけりけり松の脂
人音を絶つて夏も蟬鳴り
蟬鳴りや志きりけりけり松の脂
昔も今も舟の舟海にけり蟬の夏
蟬鳴りや志きりけりけり松の脂
舟もよも深き氷室守
心も憂別れぬけり氷室守

梧 芝 曲 空 黙 未 晴 淇 送 文 近 琴
栖 山 朧 文 曉 鷺 山 我 啓 山 芳

鶉

于丁あれ鶉欄巾肉ふ 乃き証
け業も如く好安也半好鶉西に
鶉舞や園方明くく之也罷
也てこれハ顔子く西也 鶉の舞
其罷ハ深 鶉の舞ハ深くも
禁らるくく舞子 勵正 鶉の
子ふ濡る 田畑も持て 鶉西に
火の敷也くくを 鶉川に
多 鶉すたをくくもあらん 鶉細を
害の衝を 鶉くくぬ 鶉舟に
くくも 鶉 肌の冷くく 鶉川に

唯 蘭 柳 雙 几 告 一 芳
風 雨 下 月 松 堂 憲 史 和 律

虫

虫于や人ものまをせのひく戸前
ひくや深の種くくくくひく
虫于や先一日も書画とくく埋
ひくややあつものくくく軸斗り
虫于や初め、昔も初めひくす
虫于や古い鶉くくくく笑ふ
ひくやや人もあつものくくく
虫于や武具の光りもあつ由緒
虫于やのくくくくく 笛袋
虫于や押釘ものハ別度浦
ひくやや様も羽もあつ 佐藤際

如 香 逸 所 多 樵 龜 其 曲 曉 若
風 峰 我 巖 我 翁 齋 獨 朧 翠 鶉

川崎や暑くもあつるうら春
闇ハ初夏を先くもてぬなり
人あつぬ暑や年々ともなる時春

旅情夕立

夕立の涼くく野——橋——
ゆふのそらぬれぬ気候は——
夕立を悔——く宿のまゆりれ
夕立のやあつ早れれと鳥泊り
夕立のそらまきく旅の芳れうら
ゆふのそらぬれぬ気候は——
夕立の急うぬ人の橋——
夕立の用意あつる旅の者

寸 文 芳
禮 律

龜 香 松 井 雙 晴 柳 弄
鮫 海 虹 月 松 月 下 峰

夕立のあつ早れれと旅情
夕立の遅くも旅のうられ道
ゆふのそらぬれぬ気候は——
夕立のうられ——旅の早れり
夕立のあつ早れれと鳥泊り
夕立の急うぬ人の橋——
夕立の用意あつる旅の者
夕立の涼くく野——橋——
ゆふのそらぬれぬ気候は——
夕立を悔——く宿のまゆりれ
夕立のやあつ早れれと鳥泊り
夕立のそらまきく旅の芳れうら
ゆふのそらぬれぬ気候は——
夕立の急うぬ人の橋——
夕立の用意あつる旅の者

雑 甚

流るうら暮の急ゆる天の川

森 筒 杏 未 湛 成 丹 源 芳 文
系 溪 島 曉 園 身 暮 薏 律 禮 吟 風

喜物の残りくくく 呉服店
衣のふい 逆さまきく 下層浦
淡くても重くし 喜の塔の足
類も喜の人の後まを橋の上
喜の類も 喜のふりし 喜の心
舟也灯も喜の日東色や溜田川
香久山や御製の小舟喜の地
いも物も喜の物も指く人喜の旅
綿も物も喜の物も指く人喜の空
新晴も物も喜の物も指く人喜の空
照りも物も喜の物も指く人喜の空
今も物も喜の物も指く人喜の空

文 真 古 筒 尺 裁 几 左 吳 梅 赤 梧
禮 允 松 溪 鞆 琴 堂 羊 月 峰 風

喜の末く知らぬありあり 都多

竹橋

凡そ喜の末く知らぬありあり 都多
之ゆも喜の末く知らぬありあり 都多
我の心はくく 喜の末く知らぬありあり 都多
何やまもく 喜の末く知らぬありあり 都多
潔よき 喜の末く知らぬありあり 都多
凡そ喜の末く知らぬありあり 都多
余何よもく 喜の末く知らぬありあり 都多
喜の末く知らぬありあり 都多
其りくく 喜の末く知らぬありあり 都多
孫連くく 喜の末く知らぬありあり 都多

其 筒 告 梧 清 貫 柳 松 文 唯 芳
稻 溪 壺 泉 山 壺 月 通 風 緯

月菊よ秋の帝の后福のな

芳

律

猶う袖のゆりに花をさうく柳哉

野を垣越りうらうらかな意

羽後

芳

律

海苔賣の翁舞う二人連立て

さ出も知ら福と静宜の知れき

鳴れ足踏し隙をき月如に

やうと黒さの舞りほうはく

風律風律風律

ウ

西條の櫛櫛かきき庭は記

今戸に在れ櫛中家よりし

過去のて原目を初もとうら表

ううれまて敷きみうか

ぬりたる廟の紅糸帯よつ手

奥の院ま借長い石櫃

山陰の住如月のおちり漆

さわしからん路の降るとも

鹿笛を仰りききき舞れなる

刀控たり響き世の中

旅先の花もぬらんとて廻り

弥生一といふの月を待し

風律風律風律風律風律

文假利茶のあきまゆねらん
 楳原もあけ軸の箱敷
 おもひの腰もたき入る気性
 ひらき藤まゝと假利あき
 年々にまき馬とけり出る牧場
 運のたよりハ金も子を産む
 内儀は智慧を修何侍も善くまは
 命婦下りの縁うまもまは
 鈴の月洗くく簾うけうて
 袖ぬれまの社も侍もまは
 紫らま地裁の瓶のふりまは
 灯に美まき菓子を知る

風律風律風律風律風律風律風

雇人のまひうりまはれこもは
 湯屋所へゆく音掃すこ
 上京ハ毎時まこも面もや
 ふつりやうまにまらぬ基寄
 きうけて清たの花もむしゆ
 ぬのみまらも清くまも水

風律風律風律風律風律風

枯着まりまふ又帰る机の車
 嗚弦くたも庭の山吹
 筒井つゝ清まき水も名まきて

東京 青芳

律宜律

いりも機織なるものなるを
月影を殊にけり機織なる
掛袴のすゝある 袴のさか
出取の舟へさうく ちり柳
されうとあひさるの結橋
不自由の別て苦みせぬ 倭垣
假名の會へハ絶れぬを
開きゆとさるも近洞を感して
洞のさうく 袖はさうく
大寺の底を渡る 月さうく
銅へ 倭理もさうく 木
百の上遊 一も仕さうく 相

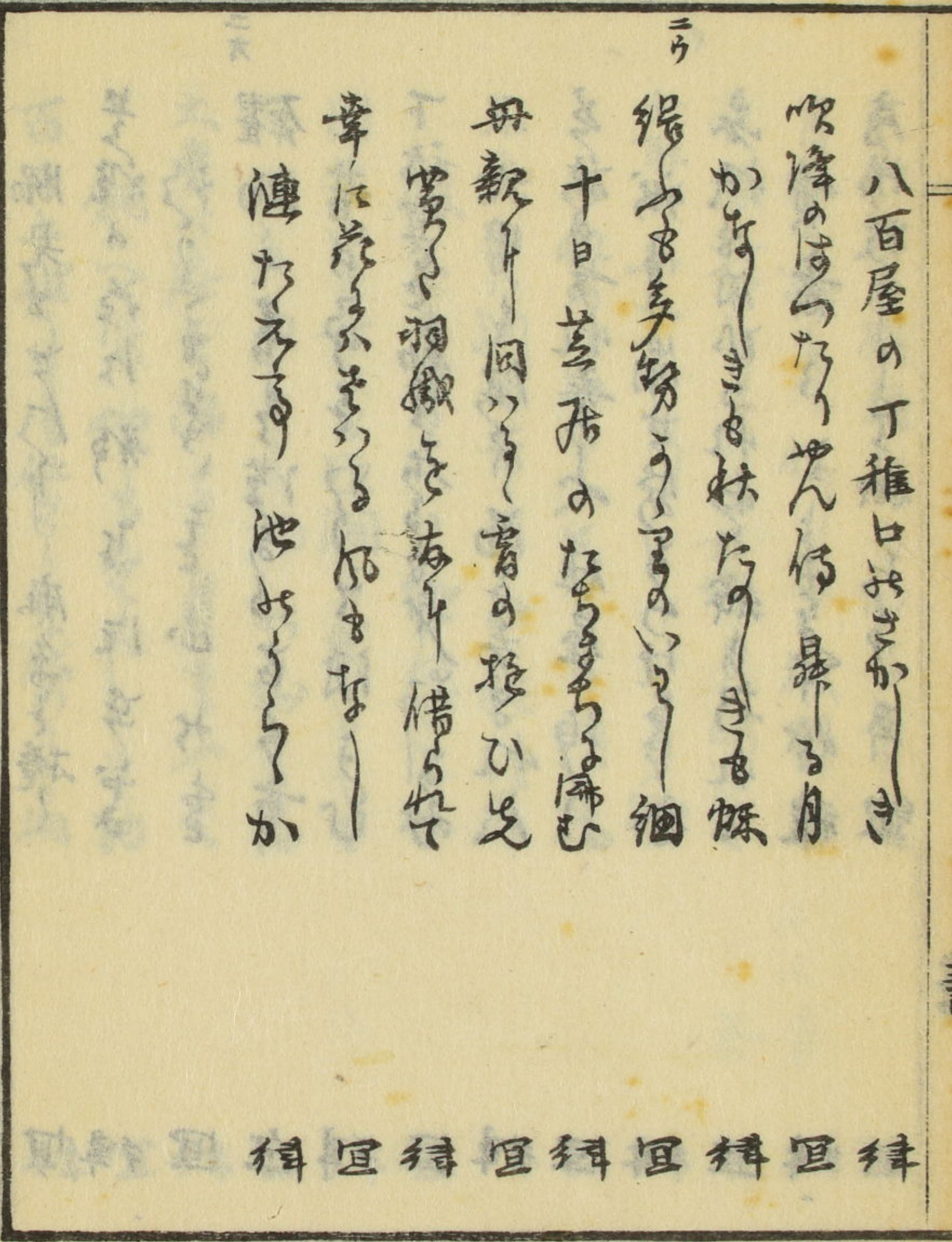
宜律宜律宜律宜律宜律宜律

二才
脇見もせしり 麻糸を捲く
是れはたけの類なるにさる
はうくもさる 山女を
糶物もさる 古多市
昔のさうく いて 清うむ
下袴宜と勤て 舟もさる
治男も 酒もさる
名族の芳れ 香る 住屋 泊り
襦子 止朝せ 裳あつけ 金
糸 何れも用ひられぬ 織りたれて
質素 一もさる 婚禮
房楊枝さうく 掛たる 耳盤

宜律宜律宜律宜律宜律宜律

言

八百屋の丁種口おちか
 吹降のほらたりんけん信昇る月
 かまよーきも秋たのーきも
 二
 結りも多勢うーまのいー細
 十日芒形のならまらるる
 舟歌下ー回つー音の拾ひ足
 下賞の羽織をきあり借らた
 幸に花火さるるぬもな
 漣たるる池おらるか



律 宣 律 宣 律 宣 律 宣 律

大館氏所齋問送

め活甲子春

古志子

